

てこな・ミュージック・ジャーナル

ショパン生誕200年 第1回 ～子供の頃のお話～

姉1人妹2人

1810年3月1日 今から200年前にポーランドのワルシャワ近郊に1人の男の子が生まれました。その名はフレデリック・フランチェク・ショパン。父39歳、母28歳ですから、この時代にしてはけっこう遅い子供ということになりましょうか。2人は4年前に結婚し、ルドヴィカという女の子の次に授かったのが、後に「ピアノの詩人」と呼ばれるショパンです。その後4年の間に妹が2人生まれますから、ショパンは4人姉妹の1人の男の子ということになります。

父はフランス語教師

一家の生計はフランス語教師として活躍する父親が担っていました。当時、貴族の家系ではなく資産のない庶民が裕福になれるとしたら、他人ができないもので需要の多い知性を生かせる職業に就ける才覚が必要でした。首都ワルシャワは東欧のパリと言われるほど文化水準が高く、父はフランス語教師として活躍できるチャンスをつかみました。ワルシャワの文化人たちの取りまとめ役として、人望を集めるようになっていき、やがて寄宿舎の経営にも乗り出したのです。

大人気のサロン

高い教育を受けさせることができるワルシャワに師弟を送り込みたい辺境の資産家貴族たちは、この寄宿舎に注目しました。経営者は優れたフランス語教師、妻は教養も高く温かい人柄、子供たちも才能に恵まれている、サロンにはワルシャワの知識人たちが定期的集う、そんな好条件の寄宿舎などどこを探してもないからです。人気の寄宿舎には優秀な子弟たちが集まり、そこで出会った同窓生たちが、ショパン終生の友人となったのです。ショパン家に来る大人たちが楽しみにしていたのが、子供たちの活躍でした。姉のルドヴィカもピアノが上手でしたし、14歳で死んでしまう妹のエミリアは詩と音楽に大変な才能がありました。子供たちは大人の話が終わると、自分の詩を朗読しピアノ演奏を披露することもあり、中でもショパンの即興演奏はとりわけ人気がありました。ショパンは大人たちがポーランドの将来について語り、歴史や文化についての議論しあう内容にじっと耳を傾け

市川市文化振興財団 音楽総合プロデューサー 小坂 裕子

ていたそうです。とりわけ興味を示したのが、ポーランドの歴史だったと言われています。壮大な歴史物語を聞き終えると、ショパンはピアノの即興演奏を始めるのです。

気難しいロシア大公もショパンファン

ポーランドはロシアの支配下にありましたから、ロシアの大公が住んでいました。周囲からは気難しく癪癪もちだと恐れられていましたが、この大公はショパンファンでした。馬車で迎えに行かせては演奏を聞くことを楽しみとして、ショパンがいる間は、人が変わったように陽気で穏やかな表情になったそうです。ワルシャワの貴族たちは、天才少年が自分のサロンで演奏してくれるように招待状をしたためては、ショパンの父に使いを送りました。でも両親が優先するのは勉強で、厳しく戒めるのは礼儀作法、年齢に見合った伸びやかな日常が成長の糧となると両親は考えていました。おかげで、ショパンは折り目正しく、知性も感性も豊かな子供に育っていったのです。

ユーモア好きのショパン

14歳の夏休み、ショパンは初めてワルシャワから150キロ離れた寄宿舎の友人の別荘に滞在しました。シャファルニヤ村のあたりは民族音楽の宝庫で、ポロネーズをすでに手がけていたショパンは、村に聞こえる農民たちが奏でる音楽に夢中になりました。夏は農作業もさかんで、その合間に村人は歌ったり踊ったり。道にはアヒルがよちよちと歩いています。馬に乗ったり、歌ったり、演奏したりと、楽しい毎日の様子をショパンはワルシャワの家族にユーモラスな手紙で知らせ。その一部をご紹介します。「8月11日、フレデリック・ショパン氏、馬に乗って、イヴァン・ジェヴァノフスカ嬢と競争。途中追い越されながら（馬が悪いのです）、でもゴール寸前に追いついて勝利」。「ピジョン坊ちゃん、柵に腰かけて声を張り上げて歌う村のカタラーニに会おう」と言った具合です。ピジョンとはChopinの綴り変え、そして「村のカタラーニ」とは、幼い頃、ショパンのピアノ演奏に感動して、その才能を愛でてサイン入りの金時計をくれた、当代きってのソプラノ歌手の名です。のどかな村の様子と歌手のみずみずしい声まで聞こえてくるようで、詩も絵も上手な、ショパンらしい描写ですね。ピアノ音楽の代名詞のようなショパン。クラシックファンに大人気の音楽家、その生誕200年にあたる2010年、次回もショパンにスポットを当てることにいたしましょう。